

高温に対する農作物の技術対策

令和元年8月7日
農業技術課

1 気象状況

山梨県内は、7月30日以降、連日「高温注意情報」が出され、35℃を越える最高気温が続いています。

気象庁の「高温に関する全般気象情報第1号（8月5日発表）」によると、東日本では少なくとも11日にかけて最高気温が35℃以上となる場所があるとの情報が出され、「関東甲信地方1ヶ月予報（8月1日発表）」においても気温が高いことが予想されています。

高温による農作物への影響が心配されますので、今後の気象推移に注意し、管理を徹底して下さい。

甲府市の最高気温（7月30日～8月6日）

7月		8月					
30日	31日	1日	2日	3日	4日	5日	6日
35.3	36.4	37.0	36.4	36.3	37.1	36.5	37.6

8月7日5時 山梨県の週間天気予報

日付	7水	8木	9金	10土	11日	12月	13火	
山梨県 府県天気予報へ	晴時々曇 	晴時々曇 	曇時々晴 	曇時々晴 	曇時々晴 	曇 	曇 	
降水確率(%)	-/10/30/30	10/10/30/30	30	40	40	40	40	
信頼度	/	/	C	C	B	C	C	
甲府	最高(℃)	36	38	36 (34~39)	36 (34~38)	34 (32~38)	32 (30~37)	33 (29~37)
	最低(℃)	/	26	25 (22~27)	25 (23~26)	25 (24~26)	25 (22~26)	25 (22~27)
平年値	降水量の合計		最高最低気温					
			最低気温		最高気温			
甲府	平年並 9 - 33mm		23.0℃		32.8℃			

2 技術対策

各地域で降雨の状況が異なるため、乾燥対策については地域の状況に応じて実施する。

(1) 果 樹

1) 共通事項

・乾燥している場合には、乾燥防止対策として、定期的な灌水に努める。(成熟期の園では約5日間隔で20mm、果実肥大期の園では4~5日間隔で30mm、収穫後の園(施設栽培を含む)では約7日間隔で30mmを目安とする)

※但し、収穫前の園では一度に多量の灌水は、果実品質の低下を招くので避けるとともに、収穫5~7日前からの灌水は控える。

・樹冠下は敷ワラ、敷草を実施するとともに、草生栽培園では草刈を励行する。
 ・灌水施設等のない園は、樹冠下を中心に1樹当たり200~300リットル灌水する。
 ・アザミウマ類やハダニ類の発生が多くなることが懸念されるため、定期的な防除を徹底する。特に、ハダニ類の発生が見られる園では早急に防除する。なお、多発してからでは防除効果が劣るため、初期防除を徹底する。

2) ブドウ

- ・着色始めの園では果房が高温とならないように、過度な新梢の切除や摘葉を控え、必要以上に棚面を明るくしない。
- ・高温が続く場合は着色不良になりやすいので、早めの除袋を行うが、果房に直射が当たる場合は、クラフト紙のカサかけや誘引の見直しを徹底する。
- ・結果過多園や樹勢低下樹では、早めに見直し摘房を行い、着色向上に努める。なお、玉張りが平年より良好な園では、結果過多とならないように注意する。
- ・新梢伸長が続いている樹は、着色が全体に回った時期に、新梢先端の摘心と副梢を2～3枚残して摘心し、着色向上と養水分の競合を防止する。

3) モモ

- ・着色期の過度な葉摘みや新梢(徒長枝)の剪除は避ける。
- ・反射マルチを敷く前に灌水を行う。
- ・反射光の強いマルチは、日焼け果などが起きやすいので、白色マルチを使用するか、反射マルチを敷く量や反射程度(古いマルチや裏面使用)を調節する。着色が進み次第マルチは除去する。
- ・下垂枝への支柱やつり上げにより、反射マルチとの距離を確保する。
- ・日持ち性向上のため、収穫は気温の低い朝に行う。
- ・果実硬度2～2.5kgを目安に適熟収穫に努める。なお、最高気温が35℃前後になると、着色が遅延する傾向があるため、熟度に注意して収穫を行う。

4) スモモ

- ・収穫期に高温が続く場合、過熟果の発生が心配されるので、着色にとらわれず、果実の弾力と熟度を優先した収穫に努める。

5) オウトウ

- ・花芽分化期以降の高温、乾燥は翌年の双子果の発生原因となるため、定期的な灌水な敷ワラ等により土壌乾燥を防止する。
- ・ハダニ類の発生に注意し、収穫後も定期的な防除に努める。

(2) 野菜

- ・健全な生育を促すため、定期的に灌水する。
- ・地温の上昇と水分の蒸散を抑えるため、敷きワラや敷き草を行う。
- ・果菜類では、着果負担を軽減し草勢を維持するため、不良果(奇形・変形果等)は早めに摘果し、健全果(良果)は肥大し過ぎないように収穫を適期に行う。
- ・草勢が極端に落ちている場合には、草勢の回復を図るため、必要に応じて液肥の葉面散布を行う。
- ・アザミウマ類、ハダニ類、オオタバコガなどの害虫による被害が増加することが懸念されるため、ほ場での発生に注意し、発生初期の防除に努める。
- ・夏秋なすでは、つやなし果の発生を防止するため、整枝、摘葉などを徹底し、葉面からの蒸散量を抑える。うね間灌水をする場合は、地温が下がる夕方に行い、株元まで水位を上げないように注意する。
- ・夏秋トマトでは、ホルモン処理を徹底し、着果促進を図る。また、カルシウム剤の葉面散布を行い、尻腐れ果の発生を予防する。
- ・スイートコーンは、雄穂出穂以降から収穫まで、特に多くの水分が必要となる。この時期に降水量が少ない状態が続くと肥大不足や先端不稔を引き起こすとともに、出荷時の粒の萎びの発生も懸念されるので、乾燥状態が続いているほ場では、速やかにかん水を行う。
- ・キャベツは、土壌水分の少ない状態が続くと、定植時の活着が不良となり、苗が枯死する場合がある。また、結球期以降では小玉化が懸念されるので、乾燥状態が続いているほ場では、速やかにかん水を行う。

(3)花 き

1) 共通事項

- ・アザミウマ類、ハダニ類などの害虫による被害が増加することが懸念されるため、発生状況を把握し、初期防除に努める。

2) 施設花き

- ・寒冷紗などで、強めの遮光をするとともに、強制換気に努め、葉面温度の上昇を防止する。
- ・朝夕に灌水を行う。

3) 露地花き

- ・敷きワラ、敷き草を行い、朝夕に灌水を行う。

(4)水 稲

- ・出穂後の高温は胴割れや白未熟粒の発生が増加し、品質が低下するので、深水やかけ流しかんがいを行い、稲体を冷やす。

(5)茶

- ・敷草を行い乾燥防止を図るとともに、定期的な灌水に努め樹勢の維持を図る。

(6)畜産

1) 共通事項

- ・良質で消化率の高い飼料の給与、ビタミンやミネラルの追給求及び清浄で冷たい水の給与に努める。
- ・高温時は飼料や水が劣化しやすいので、残渣等を放置しないよう努める。
- ・観察の頻度を増加させることにより、健康悪化の兆候がないか等、家畜の健康状態をよく把握し快適性に配慮した飼養管理に努める。

2) 舎飼い家畜(牛・豚・鶏等)

- ・飼育密度の緩和、換気扇や扇風機等による送風や散水・散霧を行い、家畜の体感温度の低下に努める。
- ・寒冷紗やよしずによる日除け、屋根裏・壁・床への断熱材の設置及び屋根への消石灰の塗布等により畜舎環境の改善に努める。

3) 放牧家畜(主に牛)

- ・放牧する時は、朝・夕などの涼しい時間帯での実施や、日陰林等のある放牧地での実施に努める。

熱中症対策

暑熱環境下での作業は、熱中症(熱射病、熱けいれん、熱まひ)を生じる恐れがあるので、次の事項に注意する。

○日中の気温の高い時間帯を外して作業を行うとともに、休憩をこまめにとり、作業時間を短くする等作業時間の工夫を行う。水分をこまめに摂取し、汗で失われた水分を十分に補給する。気温が著しく高くなりやすいハウス等の施設内での作業中については、特に気を付ける。

○帽子の着用や、汗を発散しやすい服装をする。

○作業場所には日よけを設ける等できるだけ日陰で作業するように努める。

○屋内では遮光や断熱材の施工等により、作業施設内の温度が著しく上がらないようにするとともに、風通しをよくし、室内の換気に努める。

○作業施設内に熱源がある場合には、熱源と作業者との間隔を空けるか、断熱材で隔離し加熱された空気は屋外に排気する。